書 評

Atlas of the vertebrate brain: morphological evolution from cyclostomes to mammals.

SHIRO IGARASHI and TOSHIRO KAMIYA

(1972, 東京大学出版会)

このアトラスは、ヤツメウナギから人間までの主な脊椎動物の脳を、その外観の写真と切片の顕微鏡写真によって図解したものである。とりあげられた動物は脊椎動物の系統発生樹の全分枝にわたっており、円口綱、魚綱、両生綱、爬虫綱、鳥綱および哺乳綱のかから約85種が選ばれている。そして原則として、各動物とも、脳の外観についてはその背面、腹面、側面、正中矢状断面および可能な場合には頭蓋の矢状断面の写真が、また脳の切片については脊髓、延髄、橋、中脳、間脳および終脳のそれぞれの標本の顕微鏡写真が掲載されている。その数は、合計すると外観の写真が297枚、切片の顕微鏡写真は247枚に達している。

脊椎動物の脳の進化についての比較解剖学の重要性は古くから認識されていたにもかかわらず、このように系統的かつ幅広く扱った書物は皆無に近い。その理由は、適当な脳の標本を入手することがきわめて困難であるからに他ならない。このアトラスの著者である東京大学医学部解剖学教室の五十嵐至朗助教授および神谷敏郎講師も珍しい動物の脳を入手するうえになみなみならぬ苦勞をされたようである。過去10年以上にわたり、日本各地の動物園の獣医諸氏とわたりをつけ、めばしい動物が死ぬたびにその脳を集めてこられたとのことであった。また著者らが海外へ出張された折り

に持ち帰られた珍しい標本も少なくないようで、たとえばガンジス川のカワイルカの脳などはその代表的なものであろう。また、このアトラスに掲載されている脳の切片の顕微鏡写真の約3分の2は、同解剖学教室および脳研究施設の小川鼎三、細川宏、草間敏夫の各教授らが長年にわたって集積されてきたものとのことであって、その意味でこの書は著者らを含めた東京大学解剖学教室の伝統とチームワークの成果であるということができよう。ここに、これら諸氏のたゆまざるご努力にたいし深甚な敬意を表する。

さて、このアトラスの利用法であるが、まず考えられることは、動物の脳を刺激したり、破壊したりする実験の際にその部位を定位するための手引きとして役立つであろう。とくにこのアトラスには、ハト、ウサギ、ハツカネズミ、イヌなど、類書の稀な動物についても比較的詳細な切片の写真が載せられているので、これらの動物の脳を取扱うときには特別有用である。またもう一つの利用法としては、脊椎動物の脳の進化を説明したり、さまざまな動物の脳を比較する場合などの教材としてもきわめて有用であろう。しかし、こういった実際的な利用を考えなくても、ただ見るだけで楽しい、装幀も内味もともに凝っていて、洒落た本である。

(今村護郎)